

「スピーキングの指導と評価」

司会者： 浦野 研（北海学園大学）

提案者： 田村 祐（名古屋大学）
小泉 一輝（長野市立長野中学校）

このセミナーでは、スピーキングの指導と評価に焦点を当て、日々の実践を振り返り、そこに新たな要素を加えるためのヒントを提供することを目指します。提案1では、中学校での実践報告を通し、原稿などを用意しない自発的なスピーキング活動の授業への組み込み方について考えます。提案2では、タスク・ベースの言語指導におけるスピーキングの指導と評価の方法を、実例を交えて紹介します。全体を通して、中学校や高校（そして大学等）の英語の授業にスピーキング活動を効果的に取り入れる方法について考える機会となることを目標とします。

提案1. 中学校での実践（小泉）

中学校3年生の段階では、英語で討論をしたり、話し合いを英語でしたり、即興的に話したりというように、自分の考えを、内在化している英語表現を駆使してコミュニケーションをとれる生徒の姿を目指したいと思っています。

生徒も何も武器（用意された原稿やメモ書き）をもたない状況の中、英語で話すわけですから、その状況に対応できるようにするために、「似たシチュエーションでの練習」や「同じ流れでトピックが変わるといった経験」の繰り返しが必要になると考えています。

中学生の英語学習者の中には、たくさんの特性をもった生徒がいます。絵や図を見て言葉にするのが得意な生徒、文章から話すことが得意な生徒、ジェスチャーを踏まえて言葉にしていくのが得意な生徒など、自分のよさを生かして英語を学習することができるように、スピーキングの力を伸ばすためにも様々な角度から生徒に経験を積ませることを心がけています。

平成28年の10月～11月にかけて、中学3年生の授業で「自分の行きたい国」や「自分の思う偉人」を書く活動を行いました。最終的には書き表しましたが、その過程において、興味のある事柄を引き出すために、教師の与えるトピックに対してフリートークを行ったり、互いの考えを出し合ったり、興味のあることについて質問し答え合う場面を設定したり、友の発表に対してコメントや質問をしたりする活動を行いました。

そこでは、段階的に生徒に経験を積ませるために、英作文をした上で話す段階→メモをもとに話す段階→その場で考えて話す段階など、生徒が少しずつ手元に頼るものを少なくしていく工夫をしたり、これらの段階的な話す活動を違うトピックで繰り返し行う工夫をしたりすることで生徒が即興的に自分の考えを話すことを目指す活動のあり方を考えました。

スピーキングからライティングにまでつなげていった生徒たちの作品や思考の流れについて、参加者のみなさんに体験していただきながら発表したいと考えています。

提案2. タスク・ベースのスピーキング指導と評価（田村）

本発表では、タスク・ベースの言語指導（Task-based Language Teaching、以下 TBLT）の考え方に基づいたスピーキングの指導と評価の方法を提案します。TBLTとは、言語教育プログラムのすべてをタスクという単位で構成する言語指導のフレームワークです。これまでも具体的な活動の単位としてのタスクに関しては多くの研究と実践の蓄積がありますが、その評価方法が実践レベルに落とし込まれているものは多くありません。そこで、本発表ではまず TBLT の理念を概観した上で、言語使用面ではなくタスクが達成されたかどうかを評価するという考え方を紹介します。その際、到達目標をタスクの形で設定した「到達規準タスク」の重要性と、その到達規準タスクに基づいてシラバスを構成する方法について提案します。スピーキングの評価方法については、評価の観点を複数用意してそれらを総合して評価する分析的評価や、全体のパフォーマンスを数段回の尺度で評定する全体的評価などが提案され、実践されていますが、こうした従来の評価方法とタスク・ベースの評価方法の違いについても検討します。

発表の後半では、授業で用いられる教育タスク（pedagogic task）評価の例として絵描写タスクを取り上げ、実際に発表者の授業に参加した学生の発話を聞いて、(a) 達成規準をどのように設定するのか、(b) 規準を参照しながらどのように評価できるのか、の2点について、参加者のみなさんと議論したいと思います。また、現状の観点別学習状況評価の枠組みに、タスク・ベースの評価をどのように落とし込んでいけるのかについても考察します。

本発表では、参加者同士のディスカッションやフロアとのやりとりを交えたワークショップ形式を取り入れ、教室場面におけるタスク・ベース評価導入の利点や困難点について考えを深める機会を提供することを目指します。